

Knowledge Report

IX Knowledge Inc. PR MAGAZINE
Vol.45 SPRING 2023

① あすへの対談 安藤社長が聞く！
ローコード開発ツールで人材育成
全社員にリスキリング機会を提供
さらなるDXに備える

ゲスト：高村 修さん
きらぼしシステム株式会社 代表取締役社長

⑧ ユーザーインタビュー
IKIのサービスが選ばれる“わけ”【29】
お客さま：リコーリース株式会社

⑪ [特別企画] ブレイクタイム
これからの優秀なエンジニアの定義
斎藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

⑬ わが社の匠
トップ・エンジニアの軌跡②⑤ 繁田 和人

⑮ IKIの人材育成とは
社会の変化に対応できる技術者を育てるために

⑰ IKIのSDGs ロボット&プログラム体験教室
子どもたちの学びの場を再開
自分でプログラミングしたロボットに熱中！

⑱ [コラム]
年を重ねて懐かしく思う事

[今号の表紙]

一足先に春を告げる河津桜。満開の桜の中で、メジロが今まさに飛び立とうと翼を広げています。春の訪れとともに、新しい旅立ちを予感させる光景です。メジロが飛び立つように、新たな旅立ちに向けて、まずは一歩踏み出してみるのはいかがでしょうか。

IKI ナレッジ・レポート vol. 45

令和5年4月3日発行

編集：アイエックス・ナレッジ株式会社
〒108-0022 東京都港区海岸3-22-23 MSCセンタービル
TEL.03-6400-7000(代) URL <https://www.ikic.co.jp>

安藤社長が聞く！

ローコード開発ツールで人材育成



全社員に
リスキリング機会を提供
さらなるDXに備える

2018年の株式会社東京都民銀行(以下、東京都民銀行)、株式会社八千代銀行(以下、八千代銀行)、株式会社新銀行東京(以下、新銀行東京)の3行合併によって誕生した株式会社きらぼし銀行(以下、きらぼし銀行)のシステム開発・運用業務を支える、きらぼしシステム株式会社(以下、きらぼしシステム)。

2021年に同社代表取締役社長に就任され、デジタルトランスフォーメーション(DX)や全社員を対象としたリスキリング(学び直し)に取り組んできた高村修さんに、安藤社長がお話を伺いました。

きらぼしシステム株式会社
代表取締役社長

高村修

Osamu Takamura

安藤文男

Fumio Ando

経済学部から
システム開発の道へ

安藤…今日はおいでいただきましてありがとうございます。早速ですが、最初が高村社長のご経歴をお聞かせください。

高村…私は1983年に当時の東京都民銀行に入行しました。最初は、江古田支店に配属され、そこで4年間窓口業務や営業を担当、その後1987年にシステム開発部に異動しました。私はバリバリの経済学部出身でゆくゆくは支店長になるんだと思っていたので、当時は「なぜ、私がシステムの部署に？」と驚きました。システム開発部に配属となると本部に行くことになるので、「将来は本部の部長かな？」でも、システムはやったことないなと。

配属当初はプログラミング言語の教科書を渡され、課題プログラムなどに取り組んでいましたが、しばらく経つとなんとか一人前のプログラマーらしくなったことを覚えています。

その後、1995年に基幹系システムの更改、その5年後の2000年には共同オンラインシステムへの移行と2つの大きな更改案件に携わりました。いずれの案件も苦勞しました。

システムを活用した
画期的な仕組み作り

高村…システム開発部時代には、社内イントラネット構築にも携わりました。せっかくシステムを任せられたのだから何か新しいことに取り組もうと、センター集中型のシンククライアントのようなイントラネットを構築しました。当時は新しくした無線LANを引いたので、サーバーの台数が非常に膨大になり、当然費用もかさみました。当時そのことで役員に呼ばれ、田卓に役員が勢揃いしている中、「お前はなんてことをしてくれただんだ！」と(笑)。

安藤…そうでしたか(笑)。

高村…「どうしてこんなにサーバーの台数が増えていくんだ？」と聞かれて、「そのうちにこれが主流になりますから」と、私は大見得を切りました。実際、そのような仕組みが現在主流になったので良かったです。

それから当時としては画期的だと思っただのが、携帯電話を使う「営業支援システム」を大手通信事業者さんと一緒に相談しながら作ったことです。営業担当者などが顧客情報や個人情報などのデータを社外に持ち出して使う場合に、持ち出したデータの紛失や不正アクセスといった問題に対処できるよう、このシステム

3行システム統合は
スクラムを組んでスマートに

安藤…2016年のきらぼしシステムへの転籍から社長就任までの間に、東京都民銀行、八千代銀行、新銀行東京の3行合併と、それら3行のシステム統合がありましたね。合併があるとシステム側が非常に忙しくなるというイメージが強いのですが、スマートにシステム統合された印象があります。

高村…2014年10月に東京都民銀行と八千代銀行の経営統合があり、2016年4月に新銀行東京が参加し、2018年5月に地方銀行として初の3行合併により、きらぼし銀行が発足しました。3行のシステム統合は4年間で計画通りに進められ、2020年5月に完了しました。

東京都民銀行は医療福祉関係、八千代銀行は不動産関係、新銀行東京は信託銀



高村 修 Osamu Takamura

きらぼしシステム株式会社 代表取締役社長

1961年生まれ。1983年株式会社東京都民銀行(現:株式会社きらぼし銀行)に入行。その後、2014年とみんコンピュータシステム株式会社出向を経て、2016年きらぼしシステム株式会社に転籍。2021年同社代表取締役社長に就任し、現在に至る。趣味は、御朱印・鉄印集め、サイクリングなど。

考えています。
安藤…システム会社ではテレワークができるにしても、銀行本体ではなかなか難しいのではないのでしょうか。銀行業務には、顧客と直接顔を合わせないとできない部分はまだ残っている印象があります。
高村…現在ほどの金融機関の営業店も以前に比べて、来店客数は減少化傾向になっており、きらぼし銀行も例外ではありません。これまでは対面で行っていたご相談についても、オンラインでのやり取りに切り替わってきています。そうは言っても、営業担当が直接お客さまのところに行く機会は今もあります。ただ、それもコロナ禍ではオンラインの打ち合わせが多くなったように思います。

安藤…新型コロナウイルスの感染拡大で日本は大きく考え方を変えたと思います。新型コロナウイルスがなければ、日本ではテレワークはここまで浸透しなかったと思います。ある意味、黒船来航のようなものかもしれません。
今後働き方改革は進むと思いますが、中でも就労支援については、我々の業界においても要求されるスキルが相当変わってきていると思います。岸田首相は昨年10月の所信表明演説で個人のリスクリングの支援に5年で1兆円を投じると表明しました。そちらに対して、システム会社としての今後の方向性や

全社員にリスクリングの機会を提供

イメージがあればお聞かせください。
高村…当社はこれまで勘定系システムの保守サービスを中心に行ってきたので、社員に対して今おっしゃったリスクリングの機会を設けて、スキルアップできる環境を整備する必要があります。思っています。

その一環として、法人向けのeラーニングを昨年導入しました。厳選された8000以上の法人向け講座から学ぶことができるので、その動画サービスを見て資格を取ろうとする若い人たちも結構増えています。こちらは導入して良かったと思っています。それから、コーディングの経験がほとんどない、もしくは全くない社員が、ノーコード・ローコードのプログラムツールを扱える環境を整備しました。

また、老若男女にかかわらず全社員に課題プログラムを用意して学習機会を設けています。プログラミング経験を持つ社員などは、年齢に関係なくそういったツールを上手く使いこなして、その点は当社にとって新たな発見でしたね。その他、ついこの間までパートで働いていた準社員がチャットボット(人工知能を活用した自動会話プログラム)のようなものを作り始めています。IT組織が適切なテクノロジーを採用することで、まさしく社内の子供を育てることで、^{※3}が生産性や既存のビジネスプロセスを改善するシンプルなアプリケーション

行業務および自治体連携など、銀行ごとに強い分野や特徴があり、活動スタイルなども異なっていました。そのため、それぞれの考え方がシステムに反映されていて、システムの統合はきらぼし銀行にとって欠かすことのできない重要課題でした。

3行が合併した段階では、基幹システムはそれぞれのシステムが併存する形で稼働していました。システム統合は、最初に新銀行東京の基幹システムを東京都民銀行の基幹システムに統合し、八千代銀行の基幹システムとはリレーシステムで接続しました。その次に、併存していた東京都民銀行と八千代銀行の基幹システムを東京都民銀行側に統合するという流れを進めていきました。

システム障害を発生させず、できる限り短期間で確実に統合を実現させるため、経営統合プロジェクトには豊富な実績を持つコンサルティング会社をパートナーに選び、役員も一丸となってプロジェクトを推進していきました。そしてその中に、ベンダー企業さんや協力会社さんも含めて多数のプロジェクトメンバーが関わりました。

3行のシステム統合以前にも、私は数回の基幹システムの更改を経験していましたが、その時はシステム担当任せというところがあったように思います。しかし、このシステム統合では、システム部門だけでなく全ての役員が「お客さま



安藤 文男 Fumio Ando

アイエクス・ナレッジ株式会社 代表取締役社長

に迷惑をかけることなく、安全にシステム更改しなければならぬ」という思いがあったのだと思います。関わった全ての人たちが、スクラムを組んでスマートに成し遂げたというのがまさに実感ですね。

きらぼしシステムのDX

安藤…今、世の中ではDXと盛んに言われています。今後、銀行としてはシステムの将来をどのように見据えていけばいいのかという観点からご意見を伺いたいと思います。

高村…東京きらぼしフィナンシャルグループにおいては、「UI銀行」^{※1}や「ラQ」^{※2}などのサービスをお客さまに提

供していくようなデジタル戦略が事業戦略の中に織り込まれています。システム統合プロジェクトと並行して、2017年にはFinTech(フィンテック)ビジネスの強化を目指すきらぼしテック株式会社を設立、2022年にはデジタルバンクであるUI銀行を開業しています。

当社のDXの取り組みでいうと、新型コロナウイルスの感染拡大が本格化する2020年3月にはリモート環境を整え、いち早くテレワーク体制を取り入れました。銀行システムの開発作業も簡単なツールを使ってテレワークでできるようになっています。こうした対応を他のグループ会社にも展開することで、業務効率化を図っていきたいです。そして、効率化により生まれた体力を営業分野に回すという、銀行と同様の体制整備を



を適切に構築し、提供できるようにする
のではないかと気がします。

ですから今後は、同じことを銀行の行
員向けに研修で行うようにしたいと考
えています。業務内容を熟知している銀
行の行員がローコードの開発ツールを
使って、今のDXでこんなことができる
んだと分かれればDXも進むと思います。
DXのX(トランスフォーメーショ
ン)のほうができるのは業務を詳しく
知っている人なので、業務を知り、かつ
IT技術にも通じている人を育成して
いかなければいけません。その役割を当
社が担えればなと思っています。

安藤・確かにおっしゃる通りで、業務に
精通しているお客さまからでないとい
DXのヒントが出てこないことがたく
さんあります。どう上手に両者の架け橋
となるかが重要になりますね。

高村・先ほど挙げました「UI銀行」や
「ララQ」のサービスなどは当社の社員
が銀行と一緒にやって行っていますの
で、当社の社員は良い刺激を受けつつス
キルアップもしているのではないかと
思います。

できるところから
素早く取り組むSDGs

安藤・今、DXと同様に推進されている
のはSDGs(持続可能な開発目標)です

女性の活躍する場を設けてがんばれば
良いポジションに就けるとい環境を
作っていかねければいけないと痛切に
感じますね。

今、経理関係では重要な役割と責任を
持って仕事をしていたでいる女性
がいますし、チーフとして給与計算を担
当している女性もいますので、そのよう
な方たちをどんどん増やしていきたい
と考えています。

安藤・SEの業務は女性に向いている
気がします。女性は、きめ細やかな配慮
をしますね。

高村・見ていて、非常に潜在力が高いな
と思う女性もたくさんいますね。

ね。我々システム側の人間も、持続可能
な社会ということを考えなければいけ
ない時代になってきていると思います。
SDGsに対してはどのようにお考えで
すか。

高村・東京さらばしフィナンシャルグ
ループでは、「東京さらばしフィナン
シャルグループSDGs宣言」を定めて
います。当社では、特にSDGsの「目標
3…すべての人に健康と福祉を」「目標
4…質の高い教育をみんなに」「目標15…
陸の豊かさを守ろう」といった目標に取
り組んでいるといえます。

会社の業績向上も当社の目標のひとつ
ですが、一番の目標は社員が健康に暮
らしていくことです。ですから、勤務体
制については特に配慮をしています。隠
れ残業をなくす仕組みを社内に取り入
れ、かなり厳格に残業管理をしています
(目標3に該当)。

また、新型コロナウイルスの感染拡大を機に、
ワークフローなど社内システムをクラ
ウドに移行してペーパーレス化を推進
し、今はほとんど紙媒体を使いません。
ペーパーレスという点では貢献できて
いるのかなと思います(目標15に該当)。

他には、先ほどありましたように社員
のスキルアップというところでの社員
教育です(目標4に該当)。

安藤・教育がまさしく一番重要ではな
いかと思います。
高村・いづれにしても、できるところか

安藤・当社もここ数年でやつと管理職
になる女性が少しずつ増えてきていま
す。ですから、入り口の採用のところか
ら女性の管理職を育てるという意識で
改善していかないとなかなか難しいか
もしれないですね。

高村・さらばし銀行でも、女性の支店長
が増えてきました。今後、女性の取締役
や部長などが登場してくればいろいろ
なところで大きく変わってくるんだろ
うと思います。

安藤・そう思います。あとは出産や子育て
の環境を会社としてどのように整えて
サポートしていくかということですね。

高村・今は男性も一緒に子育てをする

ら素早く手を付けていくことが大事で
すね。

安藤・我々のようなベンダー側の立場
とユーザー系のお立場とでは多少違う
ところがあると思いますが、ベンダー企
業に対しての今後の期待や、もう少し勉
強してほしいと思われるところがある
あればぜひお聞かせください。

高村・経済産業省のDXレポートにある
ように、パートナー企業には企業の変革
を共に推進していくことを一番期待し
ています。やはりDXを実践していく中
での知見やテクノロジーを共有しても
らえる、教えていただけるといところが
非常に大事なのかなと。まさにIKI
さんの企業コンセプト「Information
Knowledge Innovation」、ITと知恵に
よる変革ですね。そのようなところに大
いに期待しています。

女性活躍に期待

安藤・女性の活躍についてはどのよう
にお考えですか。

高村・新卒の社員を年に2〜4人くら
い採用していますが、女性を必ず採用し
ています。女性は研修でも良い成績を取
めますし、成果物も丁寧ですから、将来
的に立派なエンジニアになると思っ
ています。女性社員も増えていますので、

時代です。そのための休暇もきちんと付
与しなければなりません。男性も育休を
取るのは、もう当たり前ですからね。

例え無駄になろうとも
万全の準備をする

安藤・では、最後に休日の過ごし方、趣
味について伺いたいと思います。

高村・健康に気を使うようになり、ウォー
キングがてら神社巡りをして、妻と御朱
印集めをしています。

最近、関東屈指のパワースポットと
しても紹介されている埼玉県秩父市の
標高約1100mの高さにある三峯神
社に行ってきました。本当に景色のいい
ところですが、最寄り駅から遠かったで
すね。満員のバスに乗って1時間以上か
かりました。いろいろなどころで御朱印
集めをして、御朱印帳がもう6冊くらい
になっています。

それから鉄道の鉄印も集めています。
これは2020年から始まった日本全国
40社の第三セクター鉄道会社を取り組む
プロジェクトで、鉄印を集めて鉄印帳に
記載するというものです。先ほどお話し
した御朱印の鉄道版ですね。乗車券を提
示して記帳料を払うと鉄印をもらえるの
ですが、鉄印も既に全国40社のうち23社
くらい集まっています。40社全ての鉄印
を揃えると、希望者にはシリアルナン

お客さま：リコーリース株式会社

※ この取材は、さる2月8日に行いました。役職は、取材当時のものです

日頃「しっかりとモノづくりと高品質のサービス」を標榜するIKIのサービス業務が、お客さま・ユーザーに、どのように評価されているか…。システムそのものやシステム開発のプロセス、管理運用の業務品質など、各種サービスのユーザー視点から見たその効果・成果のほどを、ユーザーの方に直接お聞きすることにしました。題して「IKIのサービスが選ばれる“わけ”」



野田 拓也さん
BPT本部 情報システム部 部長

現場の目線に
合わせた
コミュニケーションで
ニーズを吸い上げる

提供サービス：システム開発

今回は、リースや融資などのリース&ファイナンス事業のみならず、集金代行サービスや介護ファクタリングなどのサービス事業、太陽光発電事業や不動産賃貸事業などのインベストメント事業を行う総合リース会社であるリコーリース株式会社さま。インタビューに応じていただいたのは、社内システムの開発・運用を一手に担い、会社のビジネス・プロセスそのものをITで変革することを目指す、BPT(ビジネス・プロセス・トランスフォーメーション)本部 情報システム部 部長 野田拓也さんです。

ビジネス・プロセス
そのものをITで変革

まず、所属部署の業務についてお聞かせください。

野田：BPT本部は当社のIT部門として、会社のビジネス・プロセスそのものをITで変革していくという大きなミッションを担っている組織です。その中に私が所属する情報システム部とIT統括部があり、情報システム部は社内やお客さまが使うアプリケーションの企画から開発、保守、運用まで一気通貫で担当しています。

情報システム部には営業系本部を担うフロントシステム課、業務系本部を担う業務システム課、そして本社系本部を担う本社システム課があり、3つの課で全社のITを担っています。

— そのような中でご自身はどのような役割を担われていますか。

野田：まずはBPT本部で重点施策として掲げているシステムの安定化があります。システムをしっかり安定稼働させることが会社の事業継続にとって最も重要です。また、法制度への対応もあります。あとは次期システムの構想です。一番大きいところではメインフレームである基幹システムの刷新があります。会社全体としてのシステム構成をどうしていくかということも考えながら進めています。

— 特にやりがいを感じるのところはどのよ



バー入りの「鉄印帳マイスターカード」が発行されます。鉄印集めのために全国を旅するようになりました。旅に出ると歩きますので、健康には非常にいいのかなと思っています。

ツバイク、電動式の自転車もあります。私はなるべく電動は使わないようにがんばっています。

安藤：それから、サイクリングをなさっていると聞きました。

高村：サイクリングも健康維持・増進の一環で始めて、2019年には、日本で初めての海峡を横断できる「瀬戸内しまなみ海道」にあるサイクリングロードを妻と走りました。全長約60kmということとで結構距離があつて疲れてしまいました。ただ、そこで出会ったさまざまな方と話したり、海沿いの開放的な風景を見たりして楽しかったので、次はしまなみ海道の西にある7つの島々を橋で結ぶ「安芸灘とびしま海道」に行こうとなり、昨年走ってきました。

高村：フランスの細菌学者にルイ・パスツール(1822~1895年)という人がいます。それこそ新型コロナウイルスになった、ウイルスの培養とワクチンの開発を成し遂げ、予防接種を世に広めた人です。

パスツールは、「偶然に準備ができていない人を助けたい」と言っています。やはり、きちんと備えておかないと幸運な場面にも出会わないと思います。システムに関わったからということもありますが、たとえ無駄になってしまっても万全の準備をすることは重要だと思っています。

またそこで感激して、さらに北海道北部の利尻島にある「利尻富士(利尻山)」を見るコースを勧められたので、今年はそのようにかと相談しています。

安藤：おっしゃる通り、大事なことだと思います。今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。今日はどうもありがとうございました。

安藤：どんどんハマっていますね。サイクリングの時、自転車はどうされていますか。

※1 きらぼし銀行の持株会社である東京きらぼしフィナンシャルグループが設立したデジタルバンク(インターネット専門銀行)。

高村：現地でレンタサイクルを利用しています。今は結構本格的なレンタサイクルサービスも用意されていて、初めてでもサイクリングにチャレンジできる環境が整いつつあります。自転車の種類も豊富で、ママチャリやスポー

※2 働いた範囲内で社内融資を受けられる「前給」サービス、デジタルマネーの決済サービス「ラッパ」の機能を備えたアプリのこと。

※3 IT専門の技術者ではなく、開発経験がほとんどない、もしくは全くない開発者のこと。

うなところですか。

野田…次期システムと呼んでいる、基幹システムの刷新ですね。今の基幹システムは1996年に稼働しているのもう25年以上経っています。それだけ長く使ってきたシステムを刷新するということが、難しくもありますが、同時にやりがいもあります。「リコーリースとしてあるべきシステムとは？」ということを探りながら刷新していくには、5年、あるいはさらに長くかかるようなプロジェクトにもなります。

現場のニーズを吸い上げる コミュニケーション

弊社との付き合いのきっかけをお聞かせください。

野田…基幹システムを中心とした大きなシステムにはそれを構築したベンダーさんがいらっしやいましたが、各現場向けに社内開発してきたツールには担当するベンダーさんがいませんでした。それらツールの開発一つひとつは小さいですが、現場からはいろいろ細かいニーズが出てきます。小回りが効きながらも現場の意見をしっかり吸い上げてくれるベンダーさんが必要だということでした。IKIさんをお願いさせていただいたのがきっかけです。

弊社や弊社の社員についてどのようなイメージをお持ちですか。

テンシヤルがあると期待しています。これまでも、アジャイル的にやってほしい、プロトタイプを作ってやるうよ、といった今までにないやり方に対して柔軟に対応していただいたり、何か提案しようとしてくださったりしたことがありました。基幹システムの刷新でも、これまであまり経験のないアプローチをしようと考えていますので、そういった意味で私たちと一緒にできる領域がますます広がる可能性があるのではないかと思っています。

一緒に走りながら考える パートナー企業に期待

ありがとうございます。今後、御社の事業を進める上で、パートナー企業に期待する点はございますか。

野田…今後は、クラウドの導入を第一に検討し、複数のクラウドを使い分けて最適なクラウド環境を実現しようと考えています。



野田…IKIさんは金融業分野でのご経験をお持ちです。そういったしっかりしたバックボーンがある中で私たちの要求に対してフレキシブルに対応していただいていると思います。営業の方も常に提案しようという姿勢を持っていただいている印象があります。また、当社と同じような会社規模で、そういった意味の親しみもありましたので、寄り添って一緒にやっていただける会社さんだなと思っています。

現場には非常に経験豊富なリーダーの方が当初からずっというらっしゃいますので、頼もしく感じています。マクロ（業務自動化ツール）系の開発や、IKIさん中心にお願いしていたツールの開発に関しては、当社の若手社員が担当することが多く、困ったときはIKIさんに聞いた方が早いということもあります。私たちの足りないところを補っていただいています。

弊社とお取引いただく中でどのような点をご評価くださっていますか。

野田…IKIさんが開発するツールを利用する担当者側で要件をきちんと出せないときでも、相手の目線に合わせたコミュニケーションをとり、会話によってニーズをきちんと吸い上げていただいています。しっかりと役割を担っていただき、とても助かっています。

また、IKIさんには業務の重要な場面ですら簡易ツールの開発を多くお願いしていますが、マクロひとつとっても「簡易だ

アジャイルで基盤を作っていますので、システムもアジャイル前提で作っていくことも多くなっています。ですからアジャイルに知見のあるパートナーさんや人材が必要になります。

それから私たちと二人三脚でやっていただきたいと思っています。モノづくりの部分はベンダーさんをお願いするのですが、弊社からパートナー企業さんにRFP（Request for Proposal・提案依頼書）を出してご提案をいただくというスタイルから、社員が要件定義や基本設計をしっかり考えて開発に携わっていく形で、徐々に内製化していくことを考えています。ベンダーさんとタッグを組んで進めていくことがより多くなってきているので、一緒に走りながら考えていただくことをお願いしたいと考えています。

— その中で、特に弊社に期待する点があれば教えてください。

野田…かつては業務改善活動で効率化を図っていましたが、DXでいろいろなものを極力デジタル化していった効率と品質の両方をアップしていくのが昨今の流れです。DXにおいてはデジタルを活用するかという話を避けて通れません。デジタルの部分に関しては私たちだけでは張り出せるアンテナの本数も限られているので、ITのプロフェッショナルであるIKIさんから新しい技術に関する情報を頂いたり、当社の業務に照らし合わせて活用できる技術などを提案いただ

から簡単でいいや」という感じはなく、誠実に対応いただいていますので障害が多発することもありません。

IKIに感じる 積極的な提案のポテンシヤル

— 反対にどのような点でもっとがんばってほしいと思われませんか。

野田…現場に近いところでスピーディーに対応するという点に関してはすごく頼もしいと思っていますが、IT部門の中心に近い最上流にもっと入ってきていただけるとありがたいですね。

先ほども申しましたように、基幹システムの刷新は規模が大きく、また、1996年に稼働していますので当時の要件を俯瞰的に整理できる社員はもういません。ですから、基幹システムの刷新であってもプロトタイプを作り、それを上手く使っていきましょうと考えています。例えば要件確認はプロトタイプを使って、結合テスト以降はユーザーフォームで行うなど、IKIさんにも上流の段階から一緒に考えていくような入り方をしていただくと、基幹システムなどの当社の背骨に近いところで一緒にお仕事ができるようになっていくのではないかと思います。

— 弊社から積極的に提案してほしいという点ですか。

野田…はい。私は、IKIさんにはそのポ

いたりすることを期待しています。

— ぜひ弊社社員に期待していただきたいと思えます。最後に、ご家族で起業されたこと伺いました。どのようなことをされているのか教えてください。

野田…当社では兼業・副業が認められていますので、親が副業で会社を設立し、子どもを学業の副業で社長にして「親子副業」という形で起業しました。

きっかけは、新型コロナウイルス感染症拡大による突然の休校でした。学校側も宿題などを用意できず、当時中学2年生だった息子は一日中動画を見ているわけですね。私も在宅勤務になったのでその様子を横目でチラチラ見ながら、「少しためになることをさせなければ」と思っていました。ふとした時、「将来は金持ちになりたいんだけど、どうしたらなるだろうか？」と聞かれ、この機会にファイナンシャルリテラシーを高めようと、投資や起業、税金のことも含めて話しました。お金について興味を持った息子は同級生にも知ってもらいたいと思いました。そこで、会社を立ち上げて取締役で社長という肩書を息子につけました。今では、息子が小中学生向けのお金のオンライン授業を平日の夜にやっています。

— ご本人にとっても小中学生にとっても素晴らしい活動ですね。本日はどうもありがとうございました。



ブレイクタイム BREAK TIME

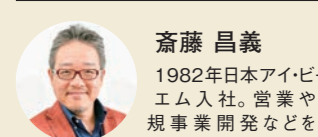
特別企画

いま、社会が、ビジネスが、生活が、私たちを取り巻く環境が、日々刻々と急激に変化しています。その変化のスピードは凄まじく、時として自分の立ち位置がわからなくなることがあるのではないのでしょうか。そうした時代に生きる私たちの「いま」と「これから」を考える」をテーマにした特別企画「ブレイクタイム」。仕事や勉強の合間にお読みください。

これからの 優秀なエンジニアの定義

齋藤 昌義氏(ネットコマース株式会社 代表取締役)

【執筆者プロフィール】



齋藤 昌義
1982年日本アイ・ビー・エム入社。営業や新規事業開発などを担当。1995年同社を退職。ネットコマース株式会社を設立し現職。多くのIT・通信関連企業新規事業の立ち上げをプロデュースするほか、講演、雑誌、Webメディア等の記事寄稿多数。著書に「システムインテグレーション崩壊」(2014)、「システムインテグレーション再生の戦略」(2016)、「【図解】コレ1枚でわかる最新ITトレンド[増強改訂版]」(2017)など。

従来のITとこれからのIT

「VUCA…社会環境が複雑性を増し、将来の予測が困難」な時代に私たちは生きていく。予め用意された正解はなく、ネットを探しても答えは見つからない。ならば、自分で考えてアイデアが湧いたら、すぐにやってみる。その結果が、うまくいかなければ改善し、うまくいったら磨きをかける。そんなやり方でなければ、現実的な解は見つからない。ゆつくり時間をかける余裕はない。変化のスピードは速く、そのスピードに対処できる圧倒的なスピードもまた必要だ。

ITもまた、このスピードが求められている。つまり、企画からユーザーへのリリースまでの総期間を短縮し、このサイクルを高速に回すことだ。そのためには、方法論、あるいは知識やスキルを変えるだけでなく、カルチャーも変えなくては難しい。

求められるビジネス目的の転換と 優れたエンジニアの要件の変化

ITビジネスに求められる技術が、「作る技術」から「作らない技術」へとシフトし始めている。「作る技術」とは、「仕様書に定められた機能を実装すること」を目的に、プログラムを作る技術。「作らない技術」とは、「ビジネスの成果を達成すること」を目的に、既存のITサービスを駆使し、できるだけ作らずに短期間でITサービスを実現する技術。その目的は、次のようになる。

- 作る技術を前提としたビジネス工数を売る
 - ・組織力を駆使して、作る技術を持つエンジニアをできるだけ多く動員し、工数を最大化して、売上規模を拡大すること
 - 作らない技術を前提としたビジネス技術力を売る
 - ・個人とチームの自律と自発を促し、作らない技術力を磨くための環境を整え、作らない技術力を持つエンジニアをお客様の事業の成果に見合う金額で提供して、高い利益率を継続的に確保すること
- また、求められるエンジニアの要件も違う。

- 作る技術を前提としたエンジニア
 - ・お客様にインタビュして、要件を定義し、WBSに従って進捗を管理するPMや仕様書に従ってコードを書くエンジニア
 - ・作らない技術を前提としたエンジニア
 - ・お客様と事業の目的とビジョンを共有し、ITサービスを提供するための障害を排除しお膳立てを整えるスクラムマスターと、既存のサービスや技術を自分たちで目利きし、最速最短でビジネスの成果に供するITサービスを実現するエンジニア

後者の要件に見合うエンジニアが、先に述べた、これからの「優れたエンジニア」となる。

	Legacy IT	Modern IT
目的	仕様書通り、QCD*1を守ってITシステムを完成させて納品する	業務の成果に貢献するために、現場の要請に対してジャストインタイムでITサービスを提供する
開発思想	テイラー主義(大量ロット生産の概念適用)	トヨタ(TPS*2/リーン)主義(JIT*3での一個流し生産の概念適用)
適用される主な開発手法	ウォーターフォール開発 他	アジャイル開発 他
開発スタイル	工事(仕様書の内容を細分化し、PMが管理監督して、手分けして全体を仕上げる)	設計(ユーザーのニーズに応じて、一人/チームが自律的に全体を仕上げる)
テスト方法	マニュアル・テスト	自動テスト(テスト駆動開発/テストファースト)
開発と運用の関係	開発運用の役割分離 開発できたら安定稼働に問題がないかを十分に時間をかけてテストしてから本番環境へ移行	DevOps(開発と運用の協調・協力体制)開発できたら即本番移行、それでも安定稼働を実現できるシステム環境作りを重視
提供価値	工数提供	顧客のビジネスの成果(ただし、金額算定の手段として工数を使う)
求められるスキル	専門分野のエンジニア	フルスタック・エンジニア

*1 Quality, Cost, Deliveryの略
*2 Toyota Production Systemの略
*3 Just In Timeの略

モダンITを支える 優れたエンジニアのマインドセット

モダンIT。実践するエンジニアは、「自律した個人」でなくてはならない。誰かの指示を待ち、組織の作法に従って、与えられた仕事をこなすのではなく、目的やビジョンをチームで共有し、最善のやり方を自ら考え、自らの意志と判断で行動できる人材だ。

そんな「自律した個人」が、これからの時代の「優れたエンジニア」だ。彼らは次のようなマインドセットを持っている。

「このテーマで文章をまとめてほしい」と伝えれば、Wordが文章を書き上げる。「この文章を簡潔に説明する図表を作ってくれ」と伝えれば、PowerPointがプレゼンテーションを作ってくれる。そんな時代もそう遠くはない。既に、GitHubのCopilotには同様の技術が使われ、コメントや関数のシグネチャから文脈を読み取り、プログラマーがこれから書くこととすることを予測して、代わりに書いてくれる。さらに、安全でないコードのパターンが生成された場合にはそれをリアルタイムでブロックしてくれる。まだ初歩的な段階だが、AI技術の急速な発展を考えれば、ソフトウェア開発の生産性を劇的に向上させ、プログラミンの常識を置き換えてしまっただろう。

テクノロジーの進化は留まることはなく、スピードを加速しながら、その適用範囲は拡大し続けている。そして、それ以前の状態に戻ることはない。そんな時代の変化を傍観していたら、あっという間に浦島太郎だ。

これからの優れたエンジニアにもまた、圧倒的なスピードが求められている。

注1 コールの法則…正常に動作する複雑なシステムは、例外なく正常に動作する単純なシステムから発展したのであるという法則。逆もまた真であり、ゼロから作り出された複雑なシステムが正常に動作することはなく、またそれを修正して動作させるようにもできない。正常に動作する単純なシステムから構築を始めるにはならないというもの。
注2 TQM: 経営管理手法の一種。Total Quality Managementの頭文字を取ったもので、日本語では「総合的品質管理」と言われる。TQMは、企業活動における「品質」全般に対し、その維持・向上を図っていくための考え方、取り組み、手法、仕組み、方法論などの集合体であり、それらの取り組みが、企業活動を経営目標の達成に向けて方向付ける。

- 客観価値の追求…主観に囚われることなく、客観的に物事の本質や原理原則を求める
- ・技術の力(未来を創り出す力)を信じている。
- ・特定の技術にこだわることなく、他の領域にも関心を持ち、自分の領域を広げることを楽しめる。
- ・常識を疑い、物事の本質あるいは原理原則を捉えようとする。
- 利他の追求…利己を排除し、利他を追求する
- ・“Don't become a Hero.”すなわち、チームとしての価値を出すことを第一に考え、そこでの自分の役割を最大限に、かつ積極的に果たそうとする。
- ・HFT(Humility: 謙虚な気持ちで常に自分を改善し、Respect: 尊敬を持って相手の能力や功績を評価し、Trust: 信頼して人に任せる)を心がけている。
- ・社会の発展やお客様の幸せなど、世のため人のために貢献することを意識している。
- 至高の追求…現状に妥協せず、常に最高を追求する。
 - ・頭で考えるだけでなく、自分で手を動かして、確かめながら体験的に理解を深めようとする。
 - ・どんなに複雑なモノでも本質を見極め、何事もシンプルに捉えて設計できる(「コールの法則」の実践)。
 - ・何よりも品質を常に重視する。常にお客様目線(社内基準ではなく)で品質を考え、自身の行動に反映させる(TQMの実践)。

優れたエンジニアは、こうしたマインドセットを持ち、会社や組織、上司に言われなくても、自分でこれを実践し、自分で育っていく。

- 自らが目指す未来の自分を描く。
- それに向かって、オープンな場も含めて学び、切磋琢磨する。
- それを現業に活かして成果を出す。
- その成果が認められて、得意分野として新たな仕事を(社内であれ社外であれ)得ることが出来る。
- そんな実践を通じて更に技術が磨かれる。

このサイクルを自ら回せるのが、「優れたエンジニア」だ。

「しっかりとしたモノ(システム)づくりと高品質のサービスを掲げ、選ばれる会社を目指すアイエックス・ナレッジ(IKEE)。この強気ブレイズの裏付けは、他ならぬ人材にあります。そうした人材群をリードしてきたIKEEの現場の顔「トップ・エンジニア」今回の「わが社の匠」は、長年にわたりITインフラを支え続け、堅実な努力によりお客さまをはじめ関わった全ての人から厚い信頼を集めている基盤技術の匠、繁田和人です。(編集部/本文敬称略)

ITの進化によって、私たちの生活はますます便利になっている。そんな便利さを支える情報システムの裏側では、多くのエンジニアたちがシステムの安定性や信頼性を守るために日々奮闘している。IKEEのトップ・エンジニアである繁田和人は、入社時から情報システムの基盤技術者として、大手通信事業者の料金システムや情報機関の基幹システムなどの重要な社会インフラを支え続けてきた。「自分が匠だなんておこがましい」と謙虚に語る繁田が、上司から「唯一無二の人材」と呼ばれるに至るまでの背景には、どのような努力の積み重ねがあったのだろうか。

偶然が導いた システム基盤技術者の道

ただ漠然と「情報処理の道に進みたい」と思っていた。そう繁田は語る。
繁田は1999年4月に入社して以来、24年にわたって社会インフラの情報システムを支え続けてきた基盤技術のスペシャリストだ。しかし、入社した当時は基盤技術に特別な関心があったわけではなかったという。

止めることが許されない 社会インフラ

現在、とある信用情報機関のシステム基盤を担当している。このシステムが止まると「お金が借りられない」「ローンが組めない」といった影響が出る、重要な社会インフラのひとつだ。
繁田がこのお客さまの業務に携わるきっかけは、基幹システムの更改であった。365日止めることが許されないため、更改作業もシステムを止めずに行うことが求められた。このようなシステムの場合、オフラインとなる夜の限られた時間でしか作業が行えないという。

今までに数々の基幹システムの更改を手掛けてきた繁田は、「サービスの提供時間を極力削らず、保守性についても考えた仕組みづくりが重要」だという。
携わるシステムは社会にとって欠かせないものだ。そのため、匠はシステムの安定稼働の維持を常に意識し努めることで、社会を支える役割の一翼を担っている。

技術の追求を目的としない

「基盤技術者に必要なのは、情報収集力、である」と匠は語る。技術の進歩が非常に速い現代においては、常にアンテナを張っておくことが重要だという。最近ではシステム基盤のクラウド化を要望するお客さまも多く、質問された時に「分かりません」では話にならないのだ。

“匠”とは “地道な努力”の積み重ね

システムソリューション1部

繁田 和人

しげたかずひと



また、基盤技術者が不足している現状に危機感を持っており、若い技術者の育成に力を入れていきたいとの思いを抱いている。

「あまり口出しをせずに考える時間を与える」「これが匠の育成論である。システム基盤とは、生き物であり、なかなか思い通りに動いてくれないものだ。臨機応変に対応できる人が基盤技術者には向いており、分からないことに直面したときにそこで立ち止まってしまおうと厳しいという。

さらに、「技術を追求することを目的にしてはいけない」と強調する。その技術を通じて、社会に貢献すること、が何よりも大切である。と。将来的には、自身の経験や知識を若手に伝えながら、より多くの技術者を育成できるように尽力していきたいと語る。

高校生の頃からパソコンに興味を持ち始め、独学でプログラムを組んでいた。その後、専門学校で情報処理を学んだ繁田は、「情報処理の道に進みたい」と考え、Sierや企業の情報部門をターゲットとして就職活動を行った。会社の規模や将来性などを調べる中で出会ったのがIKEEだった。
入社して最初に配属されたのは大手通信事業者の基幹システムを支える基盤構築プロジェクトだった。同期の仲間たちが業務システムの開発を担当する中、繁田はただ一人、基盤環境の構築を担当した。開発業務ではなかったことに驚きはあったものの、与えられた仕事に全力で取り組んだ。このプロジェクトが、基盤技術に関わるきっかけだった。

その後も、繁田のものには新たな基盤案件が次々と舞い込んできたが、一つひとつ責任感を持って取り組む姿勢は変わらなかった。そうした経験により得た自信やお客さまからの信頼によって「基盤技術の道を極めていこうと決心した」と繁田は語る。

匠とは、泥臭く 地道な努力を重ねること

2022年5月、信用情報機関の基幹システム更改に多大な貢献をしたとして、IKEEは顧客から「基盤事業プロジェクト貢献賞」を表彰された。このプロジェクトのマネジャーであり最大の立役者が繁田である。

「IKEEの中でもトップクラスの基盤技術を持つっており、加えて温厚な性格で、お客さまはもとより社員や協力会社の皆さんからも慕われている、唯一無二の人材」であると上司は語る。

泥臭く地道な努力を重ねることこそが匠の姿であると考え繁田は、基盤業務に従事しながらも、自己学習や勉強会に参加するなど、常にスキルアップに努めている。また、システムのメンテナンス中に問題が発生した場合には、迅速かつ正確に対処することが大切であるとして、手順を徹底的に作り込むなど細部にまでこだわった仕事を行っている。

担当しているシステムが、止めることが許されない社会インフラであるという重責を背負いながらも、技術の進化に常に目を光らせ、謙虚で誠実に仕事に取り組む姿は、多くのエンジニアたちにとって参考になるであろう。

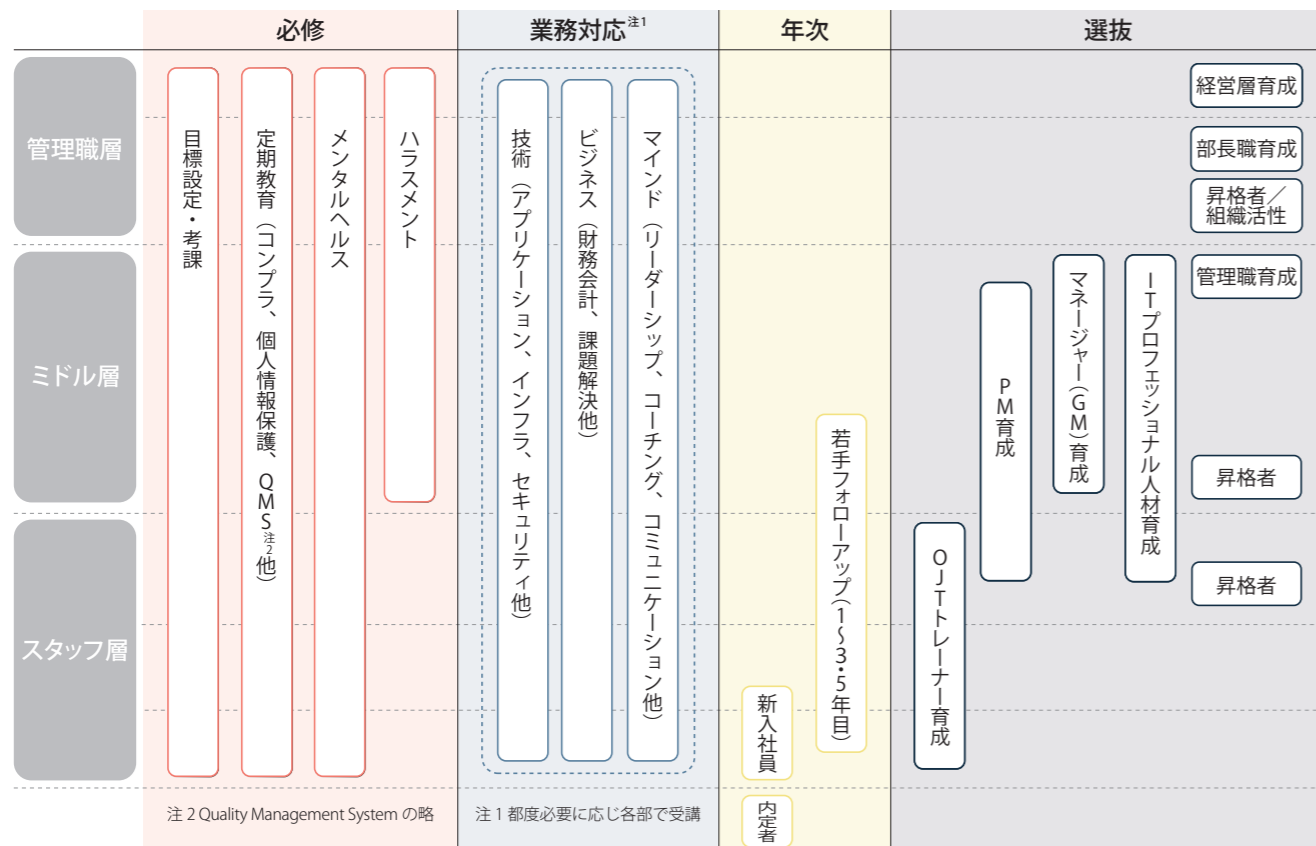
便利な生活の裏側には、常にシステムを支え続けている匠たちがいる。繁田はこれからも「地道な努力」によって、豊かな社会づくりに貢献しつづけていく。

人事部キャリア推進グループより

社員一人ひとりの「自革と自律」を教育方針として、ITエンジニアにとって必須の「テクニカルスキル」はもとより、さまざまなステークホルダーと友好関係を築くための「ヒューマンスキル」、さらに良好な組織運営を担うための「マネジメントスキル」を柱に、それぞれバランス良く、年次・経験や現場ニーズに合わせたカリキュラム

を体系的に組み合わせています。今後はさらに、「人間力の向上」を目指したカリキュラムの取り組み、移動負担の少ないオンライン型や業務の隙間で学べるeラーニングなど、より学びやすい育成環境を構築していきたいと思っています。

研修体系図



IKIは、ITを通じて、人と社会の豊かさ、そして持続可能な社会づくりに貢献する人材の育成を目指しています。

IKIの人材育成とは

社会の変化に対応できる技術者を育てるために

アイエックス・ナレッジ (IKI) の事業を支える「人材」。

誰もが長期的視点でキャリアを築ける環境を整えた手厚い人材育成は、IKIの強みのひとつです。

新入社員研修、キャリア形成研修など、若手からマネジメント層までの育成をカバーするIKIの人材育成をご紹介します。



IT未経験者を前提とした新入社員研修

IKIには、文系学部出身など学生時代にITを専門に学んでいなくても、第一線で活躍している技術者が多く在籍しています。その基礎となっているのが、入社から約3カ月かけて行う新入社員研修。「ビジネスマナー」をはじめ、「IT基礎」「プログラミング」の技術的カリキュラムを受け、研修終盤はその集大成として、疑似的なプロジェクトチームを組んで「システム開発」を体験します。IT未経験者がいることを前提としており、社会人として、システムエンジニアとしての最初のステップに最適なカリキュラムを用意しています。配属後は、プロジェクト内の先輩社員によるOJTで業務知識や実践的なスキルを習得。さらに3年次までは年度ごとにフォローアップを行うなど、一人前の技術者を育てる体制整備に力を注いでいます。

クラウドネイティブ人材の育成に注力

新入社員研修後も、市場・顧客ニーズやポジションによって変わる、求められるスキルに対応するため、IKIではキャリアに

応じたスキルやマネジメント力を身に付けられる社内研修を用意し、社員が適切なイメージで受講できるようにフォローをしています（研修体系図参照）。また、最新のIT動向やさまざまな現場のニーズに応えられるように、技術的カリキュラムも豊富な研修ラインアップを用意しています。さらに、数年前からクラウドネイティブ人材の育成に注力しています。AWS（Amazon Web Services）^{※1}やMicrosoft Azure^{※2}の資格を取得した技術者は年々増加しており、2021年度にはAWS認定資格取得数が100を超える企業として「AWS 100 APN Certification Distinction」に認定されました。2022年度には同資格取得数が200を超える見込みです。先端技術者の育成は、DX対応に特化したメンバーがそろったDX・イノベーションが事業部門と連携し、資格取得の推進や案件に対応できる人材の育成に全社で取り組んでいます。目まぐるしく変化する社会状況に対応すべく、今後も先端技術者の育成を推進していきます。

※1 Amazon Web ServicesのAWSTM、米国およびその他の諸国におけるAmazon.com, Inc.またはその関連会社の商標です。
※2 Microsoft AzureTM、Microsoft Corporationの商標です。

子どもたちの学びの場を再開

自分でプログラミングした ロボットに熱中!

2011年の活動開始以降、これまで700人以上の子どもたちが参加したIKIの「ロボット&プログラム体験教室」。コロナ禍で2020年から約3年にわたって開催を見送ってきましたが、このたびようやく再開することができました。当企画では、それぞれ3年ぶりの開催となった大田区立中萩中小学校、港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ(以下、あいぷら)での教室の様子をレポートします。



感染症対策を講じて…

2023年1月6日(金)、大田区立中萩中小学校での開催には同校の4〜6年生6名が、2月18日(土)、あいぷらでの開催には同施設を利用する近隣の小学4〜6年生8名が教室に参加しました。コロナ禍前は二人組のチームに分かれての実施でしたが、感染症対策としてロボットの組み立てからプログラミングまでの全てを一人で行うように教室内容を変更。また参加人数を制限したため、過去の教室よりも少ない参加者での開催でしたが、子どもたちにとっては、一人で没頭できる体験教室となりました。

面白かった！ またやりたい！の声

プログラミング練習では、少しずつ難易度が上がっていく中、「そういうことか!」と理解を深めつつ取り組んでいる子どもたちの様子が見られました。また、自由にプログラミングをする時間には、思い通りにロボットの動きを考えて、プログラミング作りに奮闘。想定した動作と異なる動きになってしまったロボットを前に、「どうして思い通りに動かないのか」、「どうしたらよいか」を考えてトライ&エラーを繰り返して、熱中して挑戦する姿が印象的でした。教室の最終課題である、楕円コース一周

“あいぷら” 担当者の声

久しぶりのロボット&プログラム体験教室に楽しく参加させていただきました。プログラムやAI、ドローンなどが活躍するこの時代に、自分だけのロボットを組み立てられる、名前をつけて愛着が持てる、プログラムを作って楽しみながら試行錯誤ができる、そんな特別な体験ができる教室になったと思います。

40秒ちよつどのタイムを目指して周回させるプログラムでもトライ&エラーを実践し、試行錯誤しながら改良。プログラミングで重要な「自分で考え、やってみる」を体験してもらえたように思います。教室終了後の子どもたちのアンケートには「面白かった」、「またやりたい」など教室を通して感じた素直な感想が記されており、当社スタッフ一同、子どもたちの学びの場を無事再開できたことにはっとした思いでいっぱいでした。ここからまた再スタートという意気込みで、当社は今後も多くの子どもたちにモノづくりの楽しさや、IT技術の面白さを伝える活動を継続してまいります。

column

年を重ねて懐かしく思う事

石黒 義昭

故 郷を離れ都会で生活するようになってから早五十余年。我等団塊の世代は「24時間働けますか?」と言われながら邁進し、気が付けば古稀を経て、若い時はさほど感じなかった故郷での些細な出来事が、日常のふとしたことがきっかけで思い起こされると、遠い昔の懐かしい出来事として蘇ってくるようになりました。

私 の故郷は、山形県庄内地方で鶴岡市近郊の集落で生まれ育ちました。庄内平野は日本海と出羽三山そして鳥海山に囲まれ、最上川が流れる自然豊かなのんびりとした場所ですが、真冬には鉛色の雲が空を覆い、冷たいだし風^{※1}と吹雪が頬をさす厳しい所でもあります。

鶴 岡といえば、直木賞作家の藤沢周平を生んだ地で、庄内藩をモデルにした武士物語には、居酒屋の肴に、ハタハタ、寒鰯、口細鱈^{くわがた}、赤カブ、小茄子、だだちゃ豆やさまざまな山菜が登場しますが、今でも季節になるとこの故郷の味と香りが蘇ってきます。庄内地方の地酒と肴、一度ご賞味あれ。

平 成22年に藤沢周平記念館が開館。一度見学した折、農民が中心となって幕府の決めた国替えを阻止した「義民が駆ける」を読みました。その中に登場するのが、北前船で財を成し庄内藩主を財政面から支えた酒田市の豪商本間家。本間家は、今でも当主が引き継いでおられ、本間美術館や本間家旧本邸などが往時をしのばせています。

出 羽三山(月山、羽黒山、湯殿山)は修験者の山で、麓には五重の塔があります。心柱による免震構造で国宝ですが、「杉林の中にポツンと建っている古ぼけた塔」というのが、若き日の印象でした。

日 本海に面した庄内浜には、クラゲの独創的な展示で世界的に有名になった加茂水族館がありますが、小学生の頃は、こじんまりとした今にも潰れそうな水族館で、遠足で結構な距離を歩いてペンギンとアザラシを見るために行った記憶があります。庄内浜の温泉場としては、夕日の映える湯野浜温泉と、かつて昭和天皇が行幸の際、宿泊された温海温泉があります。昔、白い縁取りをしたSLのお召列車に向かって日の丸の旗を振ってお迎えしたことをぼん

やりと覚えています。

更 に平成28年には、上皇様と上皇后美智子様が全国豊かな海づくり大会にご臨席され、庄内浜南端の鼠ヶ関港で稚魚を放流された映像を見て、とても懐かしく感慨にふけりました。多感な高校時代を、ここ鼠ヶ関から羽越本線で鶴岡までの1時間をSL通学で過ごし、木製の客車の油の匂いを嗅ぎながら、日本海に沈む夕日に感動した日々を思い出します。また、新潟県との県境にある鼠ヶ関は、白河の関^{なご}、勿来の関と並んで奥羽三関と称され、村上元三の小説で、「義経上陸の地」と言われるようになりました。記念碑もあります。

田 舎の若者が町おこしで頑張っている話を聞いて頼もしく思う今日この頃。半世紀にわたる都会生活を経てもなお、故郷での出来事を聞くたびに何となく懐かしく、古い思い出の繋がりを探しています。年を重ねるということは、そのような故郷を持ち続けている幸せを感じるのかなのかもしれません。

※1 船を沖に向かって送り出すのに都合のよい風

(社外監査役)